2026年01月10日 北陸中日新聞 朝刊 朝刊加賀表 14頁

イチゴ育苗 仲間と挑む

翠星高3年 日野一輝さん(18)

うま年へに駆ける かがん人 2026

県内でのイチゴ栽培の普及に取り組む日野一輝さん(左)らイチゴ班のメンバー＝白山市の翠星高校で

収穫量が全国最下位の県内でイチゴ栽培を根付かせようと研究している翠星高校（白山市）の生物資源コースイチゴ班は今年、自家育苗に挑戦する。安定して地元で調達できる苗があれば収量の増加などが期待できる。班長で3年の日野一輝さん(18)は「育苗のシステムを作れたら普及しやすいはず」と意気込んでいる。

農林水産省の作物統計によると、県内のイチゴ生産量はゼロ。観光農園はあるが市場への出荷はほぼないという。稲作が盛んな県内では、冬が中心のイチゴ栽培に農閑期に取り組めるため、翠星高は県内農家への普及を目指して2023年10月から栽培を始めた。

初年度は校内の温室で試験的に45株を育てた。24年度は千株植えたが収穫が遅く、出荷できたのは年明け。イチゴはクリスマスシーズンに需要が高まるため、農家の利益につながりにくいと判断し、25年度は極わせの品種に替えて促成栽培に挑んでいる。

他の果物や野菜を育てる実習では、定植から出荷まで1年を通して一つの作物に関わることは少ないといい「日々の観察や毎日の手入れがとても大変」と実感。加えて、県内では前例がほとんどない栽培。日照時間が少なく、平均気温が低くても収益を上げられるよう、適切な環境を探る必要がある。

手探りで栽培を進め、温室の内側にビニールフィルムを貼り付ける工夫にたどり着いた。ハウス内の温度を高く維持でき、燃料代の削減にもつながっている。イチゴを育てる上での課題や改善方法などを農家に伝えるため、レーンごとの生育環境の違いなどもデータを取って調べている。

県内での普及の鍵となる自家育苗。現在は県外から仕入れている苗を地元で用意できれば、コスト削減や適切な植え替えによる収量増が望める。日野さんは「県内での栽培モデルをつくり、自分たちの研究の成果を農家と共有したい。イチゴ栽培を普及させて県の特産品にしたい」と力を込める。

（中尾真菜）

石川は収量最下位 自家製へ研究

ひの・いっき　2007年８月生まれ、白山市在住。米農家の祖父の影響で、中学生の頃から農業に関心を持つ。より専門的な知識を身に付けようと、農業を学べる翠星高校に入学。卒業後は大学に進学し、イチゴなど関心のある分野の研究を深める予定。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています